

どうしようもないのに、好き

内田洋子・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

あしがき

連載のテーマが〈イタリア式恋愛術〉ときまつたことを挿絵担当の画家に伝えると、彼は少し黙ったあと、

「永久に見つからない探し物だね」
と言って、笑った。

これまでに、どういう探し物があっただろう。

イタリアに来てからのことを、一つずつ遡って思い返す。

暮らした土地ごとに魅力的な風習があり美味しい食卓があるように、各地各様の恋愛話があった。

まるで、恋愛がイタリアの名産物であるかのように。

人伝いにイタリアを振り返ると、舞台に入れ替わり立ち替わり役者が現れて始まる、独り芝居を観るようだ。

役者は男だったり、女だったり。

枯れていたたり、初々しかったり。

深い気持ちのやりとりの前には、性別も年齢も、実はあまり関係はないのかもしれない。そう思えるような、濃厚で奥行き深い人間関係が、そのときどきのイタリアにあった。

人間が好き。

《恋愛》がイタリアの象徴のように思われるのは、イタリア人が他人に対して尽きない好奇心を示すからではないか。人に興味を持つということは、自らを知ること。

恋愛は、知らない自分を探す旅のようなものなのかもしれない。

「どうしようもないのに、好きだった」

遠くを見るようにして、ときどきニニがそう口にしていたのを思い出す。

ニニは、美しい女性ではなかった。それでも、一度会うと忘れられない人だった。老いて一人で暮らしていた彼女と知り合い、人を想うということを教わった。

ニニは、訪ねてくる人がないときでも必ず、中ヒールの黒いシンプルなパンプスを履いていた。老いた足には静脈が青く浮き出ていたがかまわず、膝頭の見えるスカートで室内を足早に歩いた。彼女に近づくとわずかに甘い香りがして、玄関口や居間のソファにも同じ匂いが漂っていた。

微香の絶妙ぶりに感心すると、

「こうするのよ」

ニニは空くうに向かって香水を軽くひと吹きすると、その下を急ぎ足でくぐり抜けて見せた。

あるのかないのか、気がつかないほどの香り。

でも、その足下にはヒール。

それは、そのままニニの生き方だった。

夫の好きな香水。料理。膝下が映えるスカート。抱きつくのにちようどよい高さにしてくれるヒール。

夫を喜ばせようとするうちに、彼の好むことが彼女のスタイルとなった。結局、夫とは心も体も離れてしまったけれど、二二の暮らしの隅々まで夫への想いが沁み込んでいた。

老熟した恋愛感情は、慈悲のように静かだった。

フランスとの国境にある、山間の小さな村に住んでいたことがある。

花やオリーブの栽培をする農家が多い一帯で、農繁期になると、幼稚園の並びに住んでいた私は忙しい親に代わって、幼子たちを迎えに行くことがままあった。

その夕方もジュリアを迎えに行くと、身丈に合わない男児用のズボンをブカブカ鳴らすようにしてこちらに近寄ってきて、突然エンエンと泣き出した。

どうしたの。

小さな二歳を抱き上げようとしたとき、後ろから大急ぎで走ってきた子がいた。

その男の子は両手を広げて、泣いているジュリアの前に立ち、

「叱らないで。僕も小さかった頃は、しょっちゅう失敗したの」

と、彼女に代わって懸命に弁明した。

ジュリアはおむつが取れて、その秋から幼稚園に通うようになったばかりだった。間に合わずに、粗相したらしい。その二歳を庇かばったファビオは、三歳になったばかりなのである。

秋の夕方、幼稚園の玄関口で立ち尽して泣く幼い女の子と、泣き顔をのぞき込んで慰めていた小さな男の子の姿をよく思い出す。大切なものを守りたい、という人を慕う、無垢な気持ちにしみじみとする。

十五の恋愛話は、複雑に絡まった人間模様を解こうとして、思い直してそのままに放り置き、離れて見たものである。解こうとすればするほど、いつそう糸はもつれるものだ。規則正しく平坦に編み上がったものより、混乱したまま転がっている玉のほうが、柔らかな手触りだったりする。

もつれるほど、気になる相手。

どうしようもないのに、好き。

だから、好き。

それは私がイタリアに抱く気持ちと、とてもよく似ている。

どうしようもないのに、好き
内田洋子・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,300 円（本体）＋税
ISBN978-4-7976-7278-7

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)